

技芸の
風

「木の駅」に集めて 林地残材を宝に!

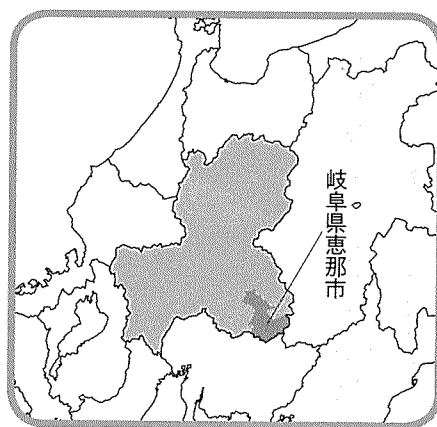
木の駅プロジェクト
笠周木の駅実行委員会
(岐阜県恵那市)

「木の駅プロジェクト」は、林家が林地残材や曲がり材を「木の駅」と名付けられた土場に持ち寄り、それをチップ用材や薪として出荷することで山の手入れを進める仕組み。2009年より恵那市中野方地区で始まった取り組みは、笠周地区（笠置山周辺の旧3町。笠置町・中野方町・飯地町）全体に広がり、登録林家数も9名から48名に増えた。2011年より「笠周木の駅実行委員会」が運営を行い、山を活用しながら地域全体に活力を与えている。

軽トラとチェーンソーがあれば可能

「畑の野菜を『道の駅』に出荷するように、山の木を『木の駅』に出しませんか」と呼びかける「木の駅プロジェクト」。これまで、山への関心が低かった林家から間伐材を相場より高く買い取り、チップ材などとして販売し、対価を地域通貨で支払うことで山と地域の商店を活性化しているという取り組みだ。その大きな特徴は2点。一つは、チップや薪用なので、搬出が容易な端材（長さ60cm以上、末口5cm以上）でも良く、本格的な山

▲笠周木の駅実行委員会の皆さん。左から、丹羽健司さん（NPO法人夕立山森林塾副代表）、安藤由美子さん（同事務局）、佐藤大輔さん（同代表）、鈴木今衛さん（実行委員会代表・杣組代表）



▲岐阜県南東部に位置する恵那市。恵那市北東部にある笠置山周辺の旧3町（笠置町・中野方町・飯地町）は、笠置地区と呼ばれる

- 仕事の経験がない人でもチェーンソーと軽トラクさえあれば始められるというハードルの低さがある。もう1点は、土場に持ち込んだ材の代金が「モリ券」と呼ばれる地域通貨で支払われること。買取価格はチップ材相場約2倍の6000円/トという設定で、軽トラの最大積載量350kg分の材を出せば1車で2100円になる計算だ。
- 木の駅プロジェクトの仕組みは、
- ① 出荷者として登録
 - ② 材を土場まで運び、自分の名札の前に積む
 - ③ 末口の直径と長さを自分で計って表に記入して提出
 - ④ 事務局が③の表を計算して出荷量を割り出し、その代金として「モリ券」を発行



▲軽トラに材を積み、土場に運び入れる林家の皆さん。材は、自分の名札の立つ割り当て区画に積む。「今まで切り捨てていた木が活かされた」「搬出は思ったより簡単だった」という感想が聞かれた

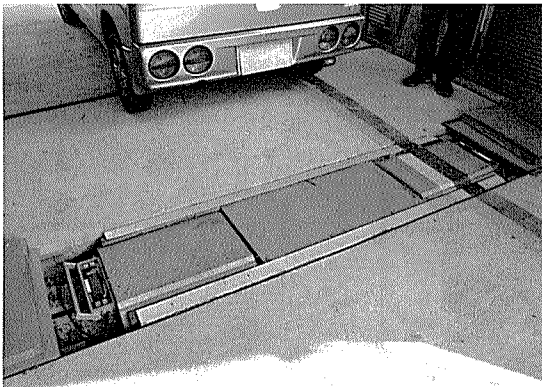
⑤ モリ券は17軒の地元の登録店舗にて使用可能

つまり、モリ券が使われることで地域が潤う仕組みとなっている。

モリ券は、チップ業者へ材を売った3000円/トに、運営を担うNPO法人夕立山森林塾(以下、森林塾)が3000円を上乗せして始まった。発足時の上乗せ分の財源は、森林塾の負担や寄付金、さらに「志(し)く材」と名付けられた寄付材の販売益などを充てた。驚いたことに、出材量は自分で検尺する完

全自己申告制で、モリ券はおもちゃの紙幣のような簡単なつくりだ。それでも順調に運営できている理由を、森林塾の副代表・丹羽健司さんは「これは人を信じることで成り立つ仕組み。互いの顔の見える山村では誰もごまかしたりしない。むしろ過少申告が目立った。そのためにも中学校区までが適正規模」と言う。

そもそも、「木の駅プロジェクト」は、高知県の「NPO法人土佐の森・救援隊」が実践している「副業的自伐林業」の取り組みを



▲当初、出材量は検尺していたが、約1年後に検量器を購入（70万円）。軽トラの車輪を乗せて重量を量る。空車と積車の重量差から積載量を算出する仕組み

休日**は**ゴルフバッグの代わりに
チェインソー

「木の駅プロジェクト」を立ち上げた森林塾

手本に、森林塾が「全国どこでも実践できるように」標準化したもの。例えば、土佐の森には材を買い取るバイオマスプラントやカンカン（車両重量を量る計器）があるが、他にはそんな施設はない。でも、「高価な計器がなくても自己検尺すればいい」といった工夫を加え、どこでもできる仕組みにマニュアル化した（現在は簡易検量器を導入済み。左写真参照）。



▲「木の駅」の検量所。建屋は地元からの寄付

は、2006年より恵那市を拠点にして、森の健康診断や山仕事などを教える講座を実施し、都市住民や地元林家が山仕事を始めるきっかけづくりを行ってきた。その森林塾の創立メンバーが丹羽健司さん（58歳）だ。現在、笠岡木の駅実行委員会の代表を務める鈴木今衛さん（63歳）も、森林塾の現代代表の佐藤大輔さん（37歳）も、実は森林塾の修了生。自営業を営む鈴木さんは、36haの山を所有する林家でもあるが、自ら山仕事をした経験はほとんどなかった。しかし、2000年の東海豪雨で川面いっぱいになる流木を見たときから、「これは天災ではなく人災。うちは山

▼▶出荷者には、明細書と一緒にモリ券が渡される。60歳半ばのこの方は、7月に3回、合計約2.3tの材を出し、モリ券11枚（11,000円相当）を受け取った。昨年一番多く出した人は約69t/年（6,000円/t換算で41.4万円）



笠岡地域木の駅プロジェクト 受取伝票

出荷者

出荷日	看査重量 (kg)	材重量 (kg)	金額換算 (5,000円/t)	運営費補填 (500円/t)	発券枚数	繰越金
2012年7月9日	1,550	780	3,900	390	3	900
2012年7月26日	1,560	790	3,950	395	4	850
2012年7月27日	1,590	820	4,100	410	4	950
合計					11枚	

上記枚数のモリ券を確かに取面し

もあるし、人ごとではない」と、山主としての危機感が生まれ森林塾に参加した。受講後には仲間17名と、森林整備を実践するグループ「杣組」を立ち上げた。「サラリーマンが週末にゴルフバッグを担いで出かけるように、私たちはチェーンソーを担ぐという感じ。他所の山で忙しくて自分の山は後回しだけど、みんなでわいわいやっている」と、楽しそう

9名だった登録林家が48名に、 昨年は442tを出材

森林塾は、5期約1000人の人材育成を終え、次のステップに移行しようとしていた矢先の2009年春に「土佐の森」と出会い、木の駅プロジェクトの構想が生まれた。12月の「木の駅」の立ち上げにあたっては、事前に中野方の全ての商店（21軒）を回る聞き取り調査を行い、「経営状態は崖っぷち」といった切実な声に耳を傾けながら、プロジェクトの説明を重ねた。同時に全ての林家にアンケートを実施し、「山の管理はしたいが、収入にならないので間伐ができない」といった声を集めた。それらの結果からも、仕組みさえできれば、材を出す担い手はあるという手応えを感じての「木の駅」立ち上げだった。



▲約0.7㎡の薪が入るカゴ（メッシュパレット）1杯を4000円で温泉施設に販売

それから、4年目を迎えようとしている。木材を積んだ軽トラが地域を走り回るだけで、周囲の注目と関心を集め、当初9名だった登録林家は、現在48名に増えた。昨年の出材量は442tを計上した。鈴村さんは、山仕事をしている人を見かけると、「こんな木は木の駅に出んさいよ」と声を掛け続けている。「木の駅」が始まったから、自分の山の手入れを始めた人もいる。「サラリーマンを定年後に始めた人で、自家用車に材を積んで出していたから、軽トラを



▲薪ボイラーを導入した花白温泉の山口岳志さん。「地域の財産である山を宝に変えることで、活気のある地域に生まれ変わるし、それを願っている人はたくさんいる」

地域のことは自分たちで考える

プロジェクトの仕組みも、3年を経てさまざまな進化を遂げた。自己検尺の手間を軽減するため、カンカンを導入した。2011年より恵那市が3000円/tの補助事業を開始し、モリ券の上乗せ分に充当できるようになった。今年から岐阜県は森林・環境税でそ

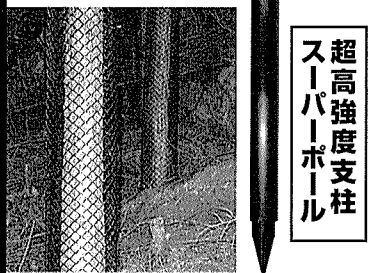
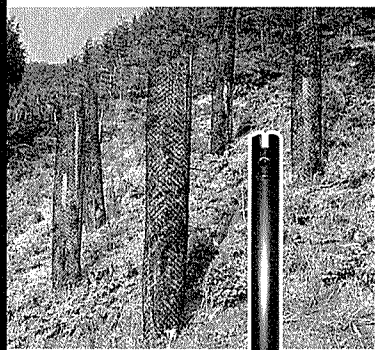
食害対策防護ネット



苗木・単木・柵・樹皮はぎ

ザブリガード

どんな木、どんな環境、にも対応!!



超高強度支柱
スーパーストール

網目大きさ 規格 多種
幅広く取り揃えております

●お問い合わせ、資料請求は下記まで

地球にやさしいネットワークを広げます

大一工業株式会社

〒636-0103 奈良県生駒郡斑鳩町幸前2-8-24
TEL.0745-75-2645 FAX.0745-75-6365
<http://www.nara-daiichikogyo.co.jp>



▲「モリ券使えます」のノボリが立つ商店

の半額を市町村に補助することを決めた。さらに、チップのほかに薪利用にも取り組み、地元の温泉施設に薪をカゴに詰めて納める事業も今年から始めた。「薪は紙になるチップ材と違って、地域の中で利用されるから、お金は地域の中だけに落ちる。薪を切る人、運ぶ人などの仕事生まれ、お荷物山を宝の山に変えることができる。雇用でなくて半業でいいんです」と、丹羽さんは言う。

また、中野方地区だけの取り組みが、笠置山周辺の旧3町へと広がり、運営組織も森林塾から現在の「笠置木の駅実行委員会」へと移行した。実行委員会で、山側も商店もNP Oも同じテーブルに着いたことで初めてお互いの状況を理解し、課題を一緒に考えるようになった。佐藤さんは、「実行委員会にした

ことで、地域のことは自分たちが考えるんだという自治意識が芽生えた。それが木の駅をやる本当の意義じゃないかな。木の駅で山も地域も確実に変わった」と言う。

「木の駅プロジェクト」は、運営マニュアルなどをWEB上(※)で全て公開し、誰もが真似できるようにしている。「木の駅」はすでに全国の約10カ所が始まり、さらに20カ所近くが年内開始準備中だ。今年の5月には、そんな団体が全国から集まって恵那市田野方町で「木の駅サミット」を行った。会場は、自分の地域を自分たちの手でなんとかしたいと立ち上がった人たちの熱気に満ちていた。各地から届く報告は、丸太を積んだ軽トラが走り回り、地域を変えて行く様子だった。

(取材・文/森順子)

※「木の駅プロジェクト」Webサイト
<http://kinoeki.org/>